

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19252002

研究課題名（和文） 東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究

研究課題名（英文） Study on Basic Structure, Dynamics, and Sustainable Development of 'Local World' in East Asia

研究代表者

藤井 勝 (FUJII MASARU)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：20165343

研究成果の概要（和文）：本研究は、東アジアの地方社会を「地方的世界」という観点から、地方社会の形成の論理、現代的な変化の特質、そして今後の発展の可能性や課題を明らかにした。東アジアの地方社会では村落と都市（町）は対立しているのではなく、歴史的文化的伝統の上に成り立つ両者の有機的な関係が形成されてきた。そして、それに立脚して「地方的世界」が存在してきた。したがって村落はもとより、地方都市（町）、そして両者の関係の繁栄や再生こそ、地方社会、延いては東アジア自身の豊かな発展に不可欠であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has investigated logics of formation, characteristics of contemporary change, and possibility and tasks of sustainable development of local societies in East Asia from the viewpoint of 'local world'. Villages and local cities (towns) in East Asia have never been opposed to each other, but organic relationships between them, standing upon historical and cultural traditions, in each local society, have been formed. And 'Local world' has been created on this basis. Therefore, not only prosperity and regeneration of villages, but also those of local cities (towns) and relationships between them, are indispensable for affluent development of local societies and East Asia itself.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2008年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2009年度	8,500,000	2,550,000	11,050,000
2010年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
年度			
総計	32,400,000	9,720,000	42,120,000

研究代表者の専門分野：社会学

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：地方社会、農村、都市、持続可能性、社会変動、グローバル化、東アジア

1. 研究開始当初の背景

(1) 東アジア（東北アジアと東南アジアを含む）の発展はめざましく、この発展を背景に「東アジア共同体」構想も生じている。しかしながら東アジアの発展において主に注目

されているのは大都市・首座都市（圏）であり、背後にある地方社会の問題は十分に視野に入っていない。しかしながら本来、東アジアの特性は、広大な地方社会を内包していることであり、そのなかに非常に多様な地

方文化が歴史的に息づいてきたことである。

(2) 現代においては人口の大都市への集中傾向が強まること、またグローバル化のなかで画一化が強まることによって、地方社会の危機が生じていることも確かである。しかしながら多様な地方社会の発展は、東アジア全体の発展にとって不可欠の要素である。それなくしては、「東アジア共同体」も実現できないであろう。その意味において、東アジアの地方社会の解明を強化することは是非とも必要である。

2. 研究の目的

(1) 以上の背景に立って、本研究は東アジアの地方社会について個別かつ全体的に解明することを目的とするものである。そのために、地方社会を「地方的世界」という観点から捉え直して、地方社会の歴史的社会的意味を明確にし、研究の展開を図った。

(2) 本研究の観点である「地方的世界」とは、地方都市(町)―村落(農山漁村)関係から成り立つ地方社会のことである。地方社会を、地方都市(町)―村落関係から捉えると言い換えてもよい。東アジアの地方社会では、この都市(町)―村落関係が軸にあり、それ自身はさらに複層的に展開している。そして最も基底にあるのは、数多くの村落と、それらと結びついて成立している町が形成する地域社会である。この関係の種類、強度、規模、地理的範囲等は、各地方社会がおかれている国、地域、民族等の性格によって異なるが、その仕組み自身には共通性がある。

(3) 本研究では、以上の「地方的世界」について、その編成の原理や伝統、そして動態や展開を実証的に解明することを重視している。同時に、21世紀の地方社会の豊かで持続可能な発展の条件や課題を模索することも重要な位置を占めている。

3. 研究の方法

(1) 以上の目的のために、次のような研究の方法を採用し、調査研究を実施した。

①「地方的世界」の歴史的形成プロセスを、歴史社会学的な視点から分析することである。それを通じて、「地方的世界」が一つの「世界」として形成される意味や論理を明らかにした。

②「地方的世界」の変動や動態を分析することである。とくに植民地化、国民国家形成、

東西冷戦体制といった経験は、「地方的世界」に大きな変化を生み出したので、これらの側面を重視した分析を行った。

③「地方的世界」のグローバリズム下における展開を分析することである。それを通じて、現代的要因が「地方的世界」に何をもたらすかを明らかにした。

④東アジアの様々な「地方的世界」を比較することである。これによって「地方的世界」の社会的文化的な共通性と多様性を検討した。

⑤「地方的世界」の現代的再生や持続可能な発展をナショナリズム、グローバリズム、エスニズムなどとの関連で明らかにすることである。それにより地方社会の発展を一般化された概念と結びつけながら検討した。

(2) フィールドワークを中心とする現地調査に関しては、研究期間の各年次において以下のような課題を設定して調査研究を実施した。また調査成果を共有するために、年3回程度定期的な研究会を継続的に実施した。

①第1年次(2007年度)は予備調査を実施し、調査地を確定する。また調査地に関する各種データの収集と共に聴き取り調査を実施する。

②第2年次(2008年度)は、(A)地方都市(町)の歴史的形成と展開、そして(B)地方都市(町)と周辺地域の関係の特質を政治、経済、社会、文化の諸側面から明らかにする。そのため資料収集・聴き取りによる現地調査を実施する。

③第3年次(2009年度)は、「地方的世界」の現代的変容を重視した現地調査を実施する。必要な場合は、アンケート調査も行う。

④第4年次(2010年度)は最終年次のため、補足調査等を実施し本研究の完成度を高める。

(3) 研究水準の向上や研究の国際的展開・交流を推進するために、外部からの評価や国際会議を以下のように実施した。

①本研究グループ以外の専門家から、本研究への評価や指導・助言を継続的に受けた。その分野や担当者は次の通りである。

(2008年度)

東南アジア研究分野

赤木攻(元大阪外国大学学長)

東北アジア研究分野

小林一穂(東北大学大学院教授)

(2009年度)

都市・地域社会学分野

中田實(名古屋大学名誉教授)

(2010年度)

農村・地域社会学分野

細谷昂（社会調査協会理事長）
 地域研究分野
 杉村和彦（福井県立大学教授）

②国際会議を2回開催し、次の海外専門家を講演者・助言者として招聘した。その成果は各年度の報告書に掲載した。

（2009年度）

会議テーマ

「Dynamics and Diversity of 'Local World' in East Asia」(11月21日)

招聘者

金弼東教授（忠南大学社会科学部教授・韓国）

林瑋嬪（台湾国立大学文學院副教授・台湾）

Maniemai Thongyou（コーンケン大学メコン圏ブルーラリティ研究センター副

所長・タイ）

Kan Zaw（ヤンゴン経済大学学長・ミャンマー）

Sukamdi（ガジャマダ大学地理学部准教授・インドネシア）

（2010年度）

会議テーマ

「Dynamics and Sustainability of 'Local World' in East Asia」(11月27日)

招聘者

Liang Yongjia（シンガポール国立大学アジア研究所上級研究員・シンガポール）

Phan Thanh Hai（フエ遺跡保存センター副所長・ベトナム）

Joel V. Mangahas（フィリピン大学前教授・フィリピン）

4. 研究成果

(1) 従来、東アジアを地域区分する時、東北アジアと東南アジアという区分が一般的であった。しかしながら本研究の実施を通じて明らかになったことは、東アジアの「地方的世界」の歴史、文化、現代的展開等を勘案すると、この区分が必ずしも適切はないことである。特に今日、東アジアの経済発展が東シナ海沿岸域、それを南下して、東南アジア大陸部海岸線を縦断する帯を軸にしていることを考慮する必要がある。つまりそれぞれの国・地域における中央—地方という空間的配置だけではなく、東アジア全体における中心—地方（周辺）という空間配置のなかにも「地方的世界」を位置づける必要がある。この点をふまえると、「北東アジア周縁域」、「東アジア内陸域」、「東南アジア沿海域」の3地域区分が有効なことがわかった。地域区分と主な調査対象地の関係は表1のとおりである（なお、これら以外にも、若干の地方社会を比較等のため調査した）。

表1

	調査対象地	属する地方行政区	国・地域
北東アジア周縁域	豊岡	兵庫県	日本
	東海	江原道	韓国
	延吉	吉林省朝鮮族自治州	中国 東北部
	内埔	屏東県	台湾
東アジア内陸域	保山	雲南省保山市	中国 西南部
	ムアンサイ	ウドムサイ県	ラオス
	ソンラー	ソンラー省	ベトナム
	ローイエット	ローイエット県	タイ
東南アジア沿海域	ラワッグ	イロコスノルテ州	フィリピン
	バントール	ジョグジャカルタ特別州バントール県	インドネシア
	モウラミヤイン	モーン州モウラミヤイン県	ミャンマー

(2) 北東アジア周縁域の「地方的世界」

①この地域は、今日の東アジアの中心的経済発展域の北側に位置している。日本の日本海側、韓国の東海側、北朝鮮、中国東北部内陸、台湾東部などが組み込まれる。この地域の「地方的世界」は、同じ国内に東アジア経済発展地帯をもつが、周辺化されている。

②中心の地方都市（町）の形成には村落—地方都市（町）関係とともに、外部ネットワーク拠点という側面をもつ。豊岡（日本）は近代以前の海上交通拠点、東海（韓国）は植民地時代における石炭搬出港として出発した。一方、延吉（中国東北部）は朝鮮族自治州の州都、内埔（台湾）は客家文化の地方的拠点であるというように、特定のエスニシティと地方都市（町）の形成が関係している。

③今日、国内の大都市（圏）との格差のため、各調査対象地では人口流出が深刻な問題であり、放置すれば「地方的世界」の衰退は確実に進行する。このため、各調査対象地では歴史的文化的独自性を表出・表象しながら発展を模索していることが明らかになった。豊岡は旧国「但馬」という地方性を重視し、東海は東海・日本海という海域圏ネットワークへの参入を目ざし、延吉は隣接都市との連携強化による開発を図り、内埔は客家というエスニシティ性の利用による地域づくりを目指している。東海・日本海沿岸地域の海域圏ネッ

トワークは中国東北部や日本の「地方的世界」を巻き込んで現実化する可能性がある。

(3) 東アジア内陸域の「地方的世界」

①この地域は、中国西南部から東南アジア大陸部の内陸部に至る空間領域をなす。上述の東アジア経済発展帯の西側に位置し、独自の様相を呈する。その中心部をメコン川が流れ、今日では「メコン圏」として注目されつつある。中国という視点からみれば、沿岸部と内陸部という対比における内陸部の事例をなす。

②「地方的世界」は、典型的には「盆地世界」と呼ばれる村落と町の繋がりの中で生成・発達した。ローエット（タイ）のような平原部でも、その原理は歴史的文化的に継承されている。またこの地域に特徴的な民族の散在性を背景として、各「地方的世界」には複数のエスニシティによる伝統的な共生が築かれてきた。同時に、保山（中国西南部）の周辺村落の回族のように、交易従事によって各「盆地世界」を横断し、かつ繋ぐ少数民族が存在した。彼らを通じて「地方的世界」はより広い世界のなかに融合された。さらに社会主義国家とソンラー（ベトナム）の関係などにも示されるように、近代以降の国家権力による伝統の解体や再編も行われた。同様に伝統的な共生関係も変化した。つまり地方都市（町）への主要民族（保山では漢族、ソンラーではキン族）の流入が進み、「地方的世界」のエスニシティ図は塗り替えられ、生活様式や文化が主要民族化（漢化・キン化）される。

③ベトナム戦争・冷戦体制の終結と共に、「地方的世界」が外部（国境をも超える）との関係を急速に拡大し、今日に至っている。また地域内で人の流動性が高まっている。そのなかで、ムアンサイ（ラオス）のように、新しい地方都市、そして「地方的世界」の生成さえ進んでいる。この急激な社会変動が伝統的な持続可能な生活を変容させており、「メコン開発」のなかで新しい持続可能性を模索する必要性が生じている。また早くより資本主義化や近代化の波の中に置かれてきたローエットでは、周辺村落における大都市等への出稼ぎ依存は深化しており、村落—地方都市（町）の関係性は相対的に弱体化しつつある。

(4) 東南アジア沿海域の「地方的世界」

①東シナ海から東南アジア沿岸部に南下する経済発展帯の南側の東西には、経済発展から相対的に取り残された地域がある。ミャンマーの沿岸部から、インドネシアの島々、そし

てフィリピンに至る領域である。マレーシアやタイ南部の沿岸部もこの地域に部分的に含まれるであろう。

②「地方的世界」は、海や海上交易と密接に結びつきながら、典型的には「ヌガラ」的なものとして存在した。同時に植民地化が「地方的世界」の編成に大きな影響を与えたともいえよう。モウラミヤイン（ミャンマー）ではイギリスの、ラワグ（フィリピン）ではスペインの植民地支配によって採用された地方行政の骨格が現在まで継承されている。

③経済的な立ち後れを背景として、地方における海外で稼ぎが目立っている。ラワグはヨーロッパやアメリカへ、モウラミヤインはタイへ、バントゥール（インドネシア）は同じマレー圏の国々へと、主に農村部より数多くの海外出稼ぎ者輩出している。ここでは「地方的世界」は海外で稼ぎへの依存を高めるため、中心となる地方都市（町）の経済は海外からの仕送り資金の貫流によって支えられるといった構造を生み出している。「地方的世界」はグローバリズムのなかに深く組み込まれており、それとの関係性のなかで持続可能な発展をどのように進めるかという課題が生じている。またこの地域の相当部分は、現代において巨大自然災害（地震・津波）に継続的にさらされてきた。バントゥールは2006年5月のジャワ島中部大地震の震源域に立地したため、大きな被害を受けたため、その復興を通じた持続可能な「地方的世界」の再生が最大の課題となっている。

(5)本研究は、三地域区分を踏まえつつ、個々の地方社会を事例的に詳細に分析することによって、以下のように、東アジア社会の研究に対して重要な寄与を行うことができた。その意味で、当該分野の学術研究へのインパクトは極めて大きいと思われる。

①従来の研究動向に照らすと、地方社会という発想から、東アジア社会を取り上げること自身が斬新である。従来は、村落なら村落、都市なら都市（とくに大都市）が研究上で主に注目されてきた。そのなかで東アジアの都市論や村落論が形成され、研究の発展も見られたことは確かだが、地方社会という中間的領域の社会空間への意識的な注目は十分ではなく、国内外においてその研究の蓄積は弱い。しかしながら、最初に述べたように、東アジアにおける広大で多様な地方社会の展開を考慮に入れば、地方社会への意識的なアプローチは是非とも必要である。

②東アジアの地方社会を横断的に数多く調査研究し、比較検討することにより、従来は漠然としていた東アジアの地方社会の全体像、そして地方社会相互の共有性や個性を明確に示すことができた。また地方社会という切り口によって東アジアを解明することを通じて、従来の研究では得られなかった東アジア像を提示することができたともいえる。さらに東アジアの地方社会の抱える問題点や課題の全体像も鮮明になった。実際、こうしたアプローチは日本の研究者はもとより、研究の国際的な規準や水準を作り出してきた欧米の研究者によってもなされてこなかった。

③地方社会を捉える観点として、「地方的世界」(local world)という概念を提起し、それに準拠して地方社会をより十全に分析したことである。具体的には村落—地方都市(町)関係を基礎において分析することである。村落—都市(町)関係による地方社会の把握は、すでに地理学などに存在することは事実だが、それらの方法では、社会、文化、生活、文化といった側面への認識が弱く、人口や市場などの形態的図式的な把握に傾斜しているために、「社会」の分析としては物足りないものであった。本研究における「地方的世界」の概念は、従来の形態論等を超えて、より「社会」的そして社会的に地方社会を把握するためのものであり、地方社会を考察する観点や枠組みとして今後有効なものである。

(6) 本研究を出発にして、東アジアの地方社会の研究は大いに発展することが期待される。本研究を契機として、関係する分野の研究者の研究モチベーションが惹起され、地方社会の研究の蓄積がなされるものと期待される。また本研究の成果は大きい自負しているが、本研究はこの分野の研究の発展のための礎になるべきであろう。本研究の実施にあたっては、それなりに完成度の高いものを目指したつもりであるが、本研究への批判的な視点による研究の展開を含めて、さまざま研究が今後展開し、この分野の研究の水準が高まることが期待される。また、それを通じて、東アジアの地方社会の個別的にまた全体的に深く追及され、その持続的発展に資することが期待される場所である。

そのため、本研究の最終報告書(2011年3月発行)を元にして、成果の主要部分を市販出版物として刊行し、本研究の成果がより多くの研究者に共有されることを目指している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計42件)

①藤井勝「タイ東北部における近代地方制度導入と地方社会の再編」『神戸大学文学部紀要』38、pp. 109-160、2011、査読(無)

②樫永真佐夫「東南アジア少数民族の年代記と歴史研究」226(通巻641)、pp. 1-15、2011、査読(有)

③多田哲久(研究協力者)「商店街と地域社会の関連—韓国・東海中央市場を事例として」『東北亜文化研究』23、pp. 289-308、2010、査読(有)

④竹内隆夫「タイの社会変動と東北地方住民の対応」『立命館大学経済学』58-5・6、pp. 236-260、2010、査読(無)

⑤油井清光「グローカル化の下の『複数の第2の近代』」、『社会学評論』60-3、2010、pp. 330-347、査読(有)

⑥ TAKAI Yasuhiro and Thanongsone SIBOUNHEUANG, "Conflict between Water Buffalo and Market-oriented Agriculture: A Case Study from Northern Laos", 『東南アジア研究』47、pp. 86-112、2010、査読(有)

⑦藤井勝「東北タイ農村の《家—村》論的考察」『年報・村落社会研究』44号、pp. 237-263、2009、査読(有)

⑧首藤明和「中国家族の关系的・実践的側面と女性の「社会圈子」からみる地域社会」、『近きに在りて』55、pp. 71-81、2009、査読(無)

⑨劉梅玲(研究協力者)「台湾客家の地域再編：南部地方都市を事例として」、『社会学雑誌』26、pp. 92-104、2009、査読(有)

⑩ Haruo Kuroyanagi, "Changes in Indonesian Agriculture and Rural Life under the Suharto Regime: Diversification in Agricultural Output and Sources of Income of Rural Inhabitants of Java during the early 1990s-", *Asian Rural Sociology* No. 3, pp. 304-333、2008、査読(有)

[学会発表](計46件)

① Masaru Fujii, "Modern Localism in Northeast Thailand: Recurrent 'Local World' in East Asia", International Conference on Asia-Pacific Societies in Changing Times: Anthropological and Archaeological Perspectives, Dec. 3, 2010, National University of Taiwan

②福田恵「「むら」と「まち」の継承と地域社会の再形成—大都市近郊と地方都市の事例から—」、日本村落研究学会(第58回)、2010年1月21日、長野県別所温泉体育館

③Wataru Kusaka, "From Interest to Moral: Changing Context of the Philippine's Class Politics", The Second Philippine Studies Conference of Japan, 2010年11月21日, International Congress Center Epochal Tsukuba

④首藤 明和・鄭 南「中国の回族ムスリムと地域社会—モスクの現地調査に基づいて」、第83回日本社会学会大会、2010年11月6日、名古屋大学

⑤魯 富子「韓国社会における情報化マウル事業の展開と地域社会の変容」、第82回日本社会学会大会、2009年10月11日、立教大学

⑥タンタン・アウン(研究協力者)「平和と地域開発—ミャンマー(ビルマ)・タイ国境地の事例—」国際開発学会第20回全国大会、2009年11月22日、立命館アジア太平洋大学

⑦林大造(研究協力者)ほか3名「2006年ジャワ島中部地震における住宅再建制度と住民相互扶助」日本災害復興学会 2008年度大会、2008年11月22日、東京大学

〔図書〕(計17件)

①藤井勝ほか27名『東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究』神戸大学、全506頁、2011

②樫永真佐夫『黒タイ年代記—「タイ・プー・サック」』、雄山閣、全163頁、2011

③藤井勝ほか24名『東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究・中間成果報告書(平成21年度)』神戸大学、全293頁、2010

④北川隆吉、鈴木則之、首藤明和、魯富子ほか7名『アジア社会と市民社会の形成』、共著、140頁(担当pp.39-58, 59-76)、2009

⑤西澤信善・北原淳編著『東アジアの経済変容』晃洋書房、全368頁、2009

⑥藤井勝ほか20名『東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究・中間成果報告書(平成20年度)』神戸大学、全216頁、2009

⑦藤井勝ほか20名『東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究・中間成果報告書(平成19年度)』神戸大学、全184頁、2008

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ealocal/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 勝 (FUJII MASARU)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：20165343

(2) 研究分担者

佐々木 衛 (SASAKI MAMORU)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：60136398

首藤 明和 (SHUTO TOSHIKAZU)

兵庫教育大学・学校教育学研究科・准教授

研究者番号：60346294

小林 和美 (KOBAYASHI KAZUMI)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90273804

魯 ゼウオン (NO ZEWON)

天理大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：30303572

奥井 亜紗子 (OKUI ASAKO)

京都女子大学・現代社会学部・講師

研究者番号：50457032

高井 康弘 (TAKAI YASUHIRO)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：00216607

福田 恵 (FUKUDA SATOSHI)

東京農工大学・共生科学技術院・講師

研究者番号：50454468

竹内 隆夫 (TAKEUCHI TAKAO)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40105747

橋本 (関) 泰子 (HASHIMOTO (SEKI) HIROKO)

四国学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：80236075

樫永 真佐夫 (KASHINAGA MASAO)

国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授

研究者番号：10342643

長坂 格 (NAGASAKA ITARU)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：60314449

日下 渉 (KUSAKA WATARU)

京都大学・人文科学研究所・助教

黒柳 晴夫 (KUROYAGI HARU)

椋山女学園大学・文化情報学部・教授

研究者番号：80097691

北原 淳 (KITAHARA ATSUSHI)

龍谷大学・経済学部・教授

研究者番号：30107916

橋本 卓 (HASHIMOTO TAKASHI)

同志社大学・法学部・教授

研究者番号：00208448

油井 清光 (YUI KIYOMITSU)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：10200859

白鳥 義彦 (SHIRATORI YOSHIHIKO)

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：20319213

(3) 連携研究者 なし